The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	思弁家パスカルの小生物観 ： 『パンセ』における思想と説得
Author(s)	
Citation	令和6（2024）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2025
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101247
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.02

令和６年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	まつい　てん 松井　天	学部 学科	文学部人文学科	学年	３年
ふりがな 共　同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	山上　博嗣	所属	人文学研究科(文学部)		
研究課題名	思弁家パスカルの小生物観―『パンセ』における思想と説得―				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

1. 研究背景

ブレーズ・パスカル (1623-62) の遺稿がまとめられ、出版された『パンセ』には、未刊に終わった著作『キリスト教護教論』の準備メモとして、人間性の観察や考察、文体論や修辞論などが含まれている。その中には度々動物や植物といった人間以外の生物が比喩として登場する。それらの断章や表現は、思想家パスカルの研究として考察の対象となってきた。それらの研究において、パスカルは思考を持たぬ機械として動物を人間と存在論的に異なる存在と捉える動物機械論者とされてきた。

一方、登場する動植物、そしてそれらを用いた表現は、「考える葦」のように印象的な名句として扱われたり、デカルトやモンテーニュといったパスカルに影響を与えた思想家の著作、そして聖書などに登場していたりと、パスカルの思想の分析だけではなく、その表現やレトリック自体に考察の余地と価値が十分にあるものとなっている。

2. 本研究の目的

上記背景から、本研究課題「思弁家パスカルの小生物観―『パンセ』における思想と修辞―」は主として以下の 2 つを目的とする。すなわち、(1)パスカルのテクストにみられる動物を用いた表現のうち、虫や植物等の小生物を用いたものについて、聖書や他の思想家の文献も参照しつつ検討すること、(2)(1)とパスカルの思想的な動物観を結びつけ、思弁家パスカルとしての生物観を考察すること、である。

3. 研究手法

本研究は上記目的のもと、以下の 3 つの段階によって実施する。

1. 思想家パスカルの動物論の理解

　パスカルの動物観に影響したとされるデカルトと比較しながら、動物機械論者パスカルの動物観がどのように解釈されてきたのかを理解する。二者の著作に加え、それらについて考察した先行研究についても参照しつつ、デカルトがパスカルに与えた影響についても検討する。

2. 『パンセ』テクストの分析

『パンセ』における生物を用いた文章のうち、小生物を用いた断章について分析する。前述の思想家の著作や聖書等の『パンセ』に影響を与えたとされる文献を適宜参照しつつ、各表現の文献的背景とその修辞的効果を検討する。

3. 思弁家パスカルの生物観の考察

1、２を結びつけ、『パンセ』における小生物の表象を考察した上で、思考し記述するパスカルの思弁家としての生物観を検討し、結論とする。

4. 研究結果

4.1. 思想家パスカルの動物論

パスカルの時代、及び彼が大きく関わったポールロワイヤル修道院において、デカルトの動物論は大きな議論を呼び、パスカル自身にも大きな影響を与えたとされる[1]。デカルトの動物論は一般に動物機械論と呼ばれる。『方法序説』において、動物はあくまで一定の配列の器官の働きによって動いているに過ぎず、自動人形と殆ど区別する必要がないとデカルトは示唆している。

> mais plutôt qu'ils(=animaux) n'en(=l'esprit) ont point, et que c'est la nature qui agit en eux selon la disposition de leurs organes: ainsi qu'on voit qu'une horloge, qui n'est composée que de roues et de ressorts, peut compter les heures, et mesurer le temps, plus justement que nous avec toute notre prudence.

> そうではなくて，むしろ次のことを証明しているのである。動物たちには精神がなくて，自然が動物たちのうちで諸器官の配置にしたがって動いているのだ。たとえば，歯車とゼンマイだけで組み立てられている時計が，われわれが賢慮を尽くしても及ばぬ正確さで，時を教え，時間を計ることができるのは知られていることだ。[2]

人間も同様に器官の配列によって機能することを、デカルトは『人間論』の人体の生理を機械論的に説明するプロセスによって示す[3]。しかし、動物は他者への伝達手段としての言語を持たず、そのことは理性を全然持っていないことを示しているのであり、人間とは異なり、動物には身体から独立した理性的精神が存在しないとデカルトは主張するのである。

このデカルトの動物機械論は、現代においてはデカルトの他著作や書簡などからその内容の制限や修正が認められ、その中で「感覚」や「生命」については動物においても存在することが示唆されているとも考えられている[4]が、同時代においては以上のような「動物機械論」という名に沿った単純化された内容として受容されており、ポールロワイヤル及びパスカルも同様の理解だったと推測される

---

[1] 山上浩嗣「デカルトの動物機械論と『パンセ』」『仏文研究』27 号 69-87、京都大学フランス語学フランス文学研究会,1996 年.

[2] Descartes, *Œuvres complètes*, tome III, Discours de la méthode, éd. sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner　Gallimard, Collection Tel, 2009, p. 120.
日本語訳　デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波文庫、1997 年、p. 78.

[3] 金森修『動物に魂はあるのか―声明を見つめる哲学』中公新書、2012 年、p. 58.

[4] 山上(1996)

[5]。

パスカルの動物論はというと、デカルトの動物論を半ば受け継ぎ、かつ半ば異なるものとして理解される。パンセにおいては、精神と理性の存在を人間に認め、かつ動物には思考を認めないデカルト主義的な断章も見受けられる。

> Je puis bien concevoir un homme sans mains, pieds, tête, car ce n'est que l'expérience qui nous apprend que la tête est plus nécessaire que les pieds. Mais je ne puis concevoir l'homme sans pensée. Ce serait une pierre ou une brute.
>
> 手足も頭もない人間を私は思い描くことができる。足より頭のほうが必要であることを私たちに教えてくれるのは、経験しかないのだから。しかし私は、思考を欠いた人間を思い描くことはできない。そんなものがあるとすれば、石ころか獣だろう。(S143-L111)[6]

この断章は獣が言語や思考を持たないとするデカルトの論述を受け継ぐものとなっており、獣は言語や思考を欠いた存在として提示される。

さらにパスカルは人間が動物と同じく物質的なもの、すなわち物質的な機械の要素も人間は持ち合わせていることを示しつつ、動物との間には非物質的な精神と思考の存在という決定的な存在論的な差異を認めている。

> Instinct et raison, marques de deux natures.
>
> 本能と理性、二つの本性を示すしるし。(S144-L112)
>
> La grandeur de l'homme est si visible qu'elle se tire même de sa misère. Car ce qui est nature aux animaux, nous l'appelons misère en l'homme. Par où nous reconnaissons que sa nature étant aujourd'hui pareille à celle des animaux, il est déchu d'une meilleure nature qui lui était propre autrefois.
>
> 人間の偉大さはきわめて明白なので、そのみじめさからさえも、偉大さを引き出すことができる。なぜなら動物にとって自然なことも、それが人間にあっては、みじめさと呼ばれるのだから。そこから私たちは理解する。人間の本性は今や動物の本性と等しいが、かつて人間にはもっと優れた固有の本能があり、人間はそこから転落したのだと。(S149-L117 より抜粋)

ここでパスカルが問題にするのが人間に内在する動物的側面である。デカルトもその側面を認めていたことは示した通りだが、思考に尊厳を認めるパスカルはこの動物性＝本能にも偉大さを認めるのである。パスカルは人間がその動物的側面たる本能からも神への愛に近づく可能性を示唆する。

---

[5] 同著

[6] *Pensees*, *Les Provinciales, Pensees* et opuscules divers, textes édition par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris, Librarie Générale Française, ≪La Pochothèque≫,2004.
日本語訳　パスカル『パンセ(上)』塩川徹也訳、岩波文庫、2023 年.
以後『パンセ』の引用は、各引用末尾に Sellier 版断章番号-Lafuma 版断章番号と表す。

Il faut acquérir une créance plus facile qui est celle de l'habitude qui, sans violence, sans art, sans argument, nous fait croire les choses et incline toutes nos puissances à cette croyance, en sorte que notre âme y tombe naturellement.

もっと容易な信心、習慣による信心を身につけなければならない。それは暴力も技巧も論証もなしに事柄を信じさせ、私たちの機能のすべてをこの信念に向かわせる。(S661-L821)

これらの断章は信仰を獲得する手段として「習慣」、すなわち自動人形たる動物的側面を提示し、さらに他断章においてパスカルは理性と信仰を対立者として提示する。つまりはパスカルにとって信仰とは、理性ではなく心で感じ取るものであり、そこに繋がるものとして習慣、つまりは動物的側面である本能や身体を提示するのである。

こうした信仰を巡るパスカルの考えは『護教論』全体、そして他著作において「説得」という形で表れる。

De sorte que l'art de persuader consiste autant en celui d'agréer qu'en celui de convaincre, tant les hommes se gouvernent plus par caprice que par raison !

こういうわけで、説得術は論破する技法ばかりでなく、それと同じくらい、気に入られる技法から成り立っている。それほどまでに、人間は理性よりも気まぐれによって行動するものなのだ[7]。

ここで説得術の内容として提示される「納得させること」「気に入られること」のうち、前者は理性、後者は心に作用することは明白である。無神論者に信仰を訴える上で、パスカルはこの 2 つ、特に後者を巧みに利用する。その中で、時にデカルトや他思想家の論を引継ぎ、時に発展・反駁しながら『護教論』を進めていくわけだが、その中でも小生物を用いた表現の説得術・イメージについては次章で論じていく。

4.2. 『パンセ』における小生物

『パンセ』において、様々な断章で虫や植物といった小動物が登場するが、本章ではそれらの含意ごとに検討し、同書における小生物のイメージを明らかにする。

1)　些事の力

S56-L22 では、ちっぽけな虫けらの力が示される。虫けらは時には人間をも凌駕することがあるというのだ。

La puissance des mouches : elles gagnent des batailles, empêchent notre âme d'agir, mangent notre corps.

---

[7] *De l'art de persuader, De l'esprit géomérique, Les Provinciales, Pensees* et opuscules divers, textes édition par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris, Librarie Générale Française, ≪La Pochothèque≫,2004, p. 135.
日本語訳　パスカル「幾何学的精神について」『小品と手紙』塩川徹也・望月ゆか訳、岩波文庫、2023年、p. 270.

虫けらの威力。虫けらは戦いを勝利に導き、われわれの魂の働きを妨げ、われわれの遺体を食らう。(S56-L22)

ここでの「戦いを勝利に導く虫けら」や「魂の妨げ」の話は、モンテーニュの『エセー』からの影響が指摘されている[8]。「魂の妨げ」については、S81 で飛び回る虫が思考を妨げる様子とも重なるが、似たような内容として S77 がある。

Peu de chose nous console parce que peu de chose nous afflige.

些細なことに苦しめられるからこそ、われわれは些細なことに慰められる。(S77-L43)

これらの断章から虫は「些細なこと」全般を示す提喩と捉えることができる一方で、そこには人間をも凌駕する力を秘めていることも含意される。特に戦いと虫を重ねたイメージは旧約聖書にも時折登場する[9]が、これらの表現において蜂や蠅はあくまで比喩としての登場ながら、エジプトやアッシリアといった大国と重ねられるように、その強さや凶暴さを備えた存在として認識される。

S56 や S77 などの思考が妨げられる話については、知性をたやすく凌駕する小生物の身体性の構図となっており、虫の身体はとりわけ動物性全体を示すものとも捉えることができる。

こういった軽視されやすい小生物の力を再発見する態度にモンテーニュが借用されるのは、モンテーニュの動物観によるものが大きい。モンテーニュの動物観は動物礼賛論[10]と呼ばれている。動物は人間と異なる言語を持ち、知性を持つとする主張がデカルトやパスカルとの大きな相違点だが、『エセー』においてモンテーニュは、動物をいわば持ち上げるような様々な話を提示しながら自らの動物観を提示している。その上で動物より優れたものと考える人間について、以下のように述べる。

Par où il appert que ce n'est par vray discours, mais par une fierté folle et opiniatreté, que nous nous preferons aux autres animaux et nous sequestrons de leur condition et societé.

われわれが自分を他の動物よりも優れたものと考え、彼らの境遇や社会から別扱いにしようとするのは、本当の理性の働きによるものではなくて、愚かな自尊心と片意地によるものである。[11]

---

[8] Sellier 版及び塩川訳注

[9] 申命記 1 章 44 節 1「山地に住むアモリ人たちはあなたたちを迎え撃ち、蜂が襲うようにホルマまで追撃し、セイルであなたたちを撃ち破った。」
イザヤ書 7 章 18 節「その日が来れば／主は口笛を吹いて／エジプトの川の果てから蠅を／アッシリアの地から蜂を呼ばれる。」
日本聖書協会、”聖書を読む”、日本聖書協会 HP、新共同訳、https://www.bible.or.jp/read.html、参照(2024-12-23).

[10] 金森(2012), p. 38-46.

[11] *Les Essais,* Montaigne, édition établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, édition des "Notes de lecture" et des "Sentences peintes" établie par Alain Legros, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2007, p. 511.
日本語訳　モンテーニュ『エセー(三)』原二郎訳、岩波文庫、1966 年、p. 88.

このようにモンテーニュは『エセー』において人間の傲慢を批判する。

前章の通りパスカルはあくまで動物は知性を持ち合わせていないとし、人間を動物の上位に置いているが、これらの断章ではむしろモンテーニュの動物論を半ば引き継ぐ形になっている。動物には人間に匹敵する、或いは人間をも超える力があり、人間の理性はたやすくちっぽけな生物にすら敗北するのである。

理性を超越する生物、このイメージは前章において動物性にこそ価値を見出すパスカルの論にも通じる。これらの断章では、理性万能主義的な価値観を否定しつつ、モンテーニュ主義や聖書中のイメージを取り入れることで動物を低く見る読者の小生物の印象を格上げし、次に導く「中間者」としての立ち位置を読者に受け入れやすくしているのである。

2)　中間者としての人間

(1)に述べたような動物を人間の域まで或いはその上まで称揚するような表現とは異なり、人間を他生物の程度にまで「こき下ろす」ような表現も随所にみられる。

> L’homme n’est qu’un roseau, le plus faible de la nature, mais c’est un roseau pensant. Il ne faut pas que l’univers entier s’arme pour l’écraser ; une vapeur, une goutte d’eau suffit pour le tuer. Mais quand l’univers l’écraserait, l’homme serait encore plus noble que ce qui le tue, puisqu’il sait qu’il meurt et l’avantage que l’univers a sur lui. L’univers n’en sait rien.

> 人間は一本の葦にすぎない。自然のうちで最もか弱いもの、しかしそれは考える葦だ。人間を押しつぶすのに宇宙全体が武装する必要はない。一吹きの蒸気、一滴の水だけで人間を殺すのには十分だ。しかし宇宙に押しつぶされようとも、人間は自分を殺すものよりさらに貴い。人間は自分が死ぬこと、宇宙が自分より優位にあることを知っているのだから。宇宙はそんなことは何もしらない。(S231-L200)

パスカルは一本の葦と人間とを重ね、人間の矮小さを強調する。この断章にはパスカルが人間を神と動物、知性と身体性、全体と無の中間と位置付ける意図がある。立ち木も葦も、自然や宇宙といった「全体」に対しては無力極まりない存在であり、先の力強い「虫」とは真逆のイメージである。一方でそれらはみじめさを「自覚」し、「考える」植物として、他の生物と明らかに一線を画す存在であり、そこにパスカルは尊厳を見出す。その尊厳は宇宙を超える可能性をも秘めているのだ。

こうした「中間者」としての人間のイメージは「二つの無限」の中間に位置する人間として説明された、『パンセ』中最大の断章 S230-L199 で論じられるが、この断章においても小生物が登場する。

> Et que, de ce petit cachot où il se trouve logé, j’entends l’univers, il apprenne à estimer la terre, les royaumes, les villes et soi-même, son juste prix. (中略) Mais pour lui présenter un autre prodige aussi étonnant, qu’il recherche dans ce qu’il connaît les choses les plus délicates, qu’un ciron lui offre dans la petitesse de son corps des parties incomparablement plus petites, (中略) Je veux lui faire voir là dedans un abîme nouveau. Je lui veux peindre non seulement l’univers visible, mais l’immensité qu’on peut concevoir de la nature dans l’enceinte de ce raccourci d’atome

(人間よ)自分が置かれたこのちっぽけな牢獄つまりは宇宙から、地球、王国、都市、そして自分自身とその正当な価値を評価することを学ぶがよい。(中略) しかし、もう一つこれと同じぐらい不思議な驚異を目の当たりにするために、人間よ、自分の知っているものの中で最も微細な事物を探求するがよい。一匹のコナダニは、その小さな体のうちに、それよりはるかに小さな部分、(を示すが), (中略)そのうちに新たな深淵が潜んでいることを、私はお見せしたい。この縮小した内部に、目に見える宇宙ばかりでなく、概念の働きではじめて理解できる無量無辺の自然があることを描き出してみたい。 (S230-L199 より抜粋)

ここでは、他断章で人間と他生物を重ねる表現とは異なって、人間よりも明らかに小さい存在として、宇宙の対極としてダニが登場する。ただしダニの中には微細な器官があり、それぞれをさらに細かく分解すればまた宇宙が存在する。

全体—人間—無の関係性の中で、この断章におけるダニが人間より無の方向に続く無限の象徴であることはここでは明らかだが、その記述に全体を示す「宇宙 (l'univers) 」を使っていることは興味深い。「二つの無限」と一般的に説明されているものの、ダニの中にまた宇宙や惑星が存在するという一連の記述は、全体—人間—無の直線構造というよりも、全体と無が連続する円環構造を想起させる。

パスカルの宇宙観が直線か円かはさておき、ここで宇宙と虫が重ねられることが説得においての重要な点となる。(1)同様、ここにおいても、人間の動物性を受け入れやすくするパスカルの戦略があるのではないか。人間から見て全体の方向の「宇宙」と無の方向の「虫」を混同することにより、既存の人間の位置を見失わせ、その上で中間の存在としての人間の位置を提示する。さらに宇宙を含有さる虫のイメージは、(1)にみられた動物性の印象の格上げにも繋がる。

このように、「二つの無限」では通常受け入れがたい人間の動物性、惨めさを自覚させ、人間の適切な位置をより受け入れやすくする。その自覚こそが信仰のために必要だと説くパスカルにとっては、何よりこの説得自体が人間の惨めさを自覚させる行為であり、パスカルは『護教論』全体を通して、読者を信仰へとつなげる。

Après avoir entendu toute la nature de l'homme il faut pour faire qu'une religion soit vraie qu'elle ait connu notre nature. Elle doit avoir connu la grandeur et la petitesse et la raison de l'une et de l'autre. Qui l'a connue que la chrétienne ?

人間本性の全容を理解した上で。ある宗教が本物であるためには、私たちの本性を知っていなければならない。偉大さと卑小さ、そして双方の理由を知っていなければならない。キリスト教以外のどの宗教が、それを知っているのか。(S248-L215)

人間の「偉大さ」と「卑小さ」の二つの本性の自覚はキリスト教徒にのみ存在する。そこにこそ尊厳があり、パスカルは作品全体を通して自覚を促しているのである。

(1)や(2)の小生物の表現において、固定された小生物像はなく、むしろ各断章の意図に合わせてその生物の意味は揺れ動いている。この曖昧なパスカルの小生物観は、何よりも「説得」を主眼とするパスカルが小生物をレトリックとして活用したことを示している。

S'il se vante, je l'abaisse

S’il s’abaisse, je le vante
Et le contredis toujours
Jusqu’à ce qu’il comprenne
Qu’il est un monstre incompréhensible.

自慢をすれば、貶める
謙遜すれば、持ち上げる
そしてあくまで逆らいつづける
彼がついにはおのれを
不可解きわまる怪物だと悟るまで。(S163-L130)

パスカルは人間について「貶める」と「持ち上げる」を繰り返す過程で、同時に小生物の位置づけも適宜変えることになったのである。

4.3. 思弁家パスカルの動物論

パスカルの思想と表現の両面から『パンセ』中の動物観を検討した結果、「思想家」としてのパスカルはデカルトの動物機械論を引き継ぎつつも、その意図は人間の正しい位置づけにあった。『護教論』においては、無信仰者に信仰を説得するにあたり、粘り強く小生物の価値をモンテーニュや聖書のイメージも借用しながら論じ、その上で神と動物、全体と無といったものの中間としての人間を提示する。その中で小生物は時に強く、時にちっぽけでみじめな存在として扱われていくが、その小生物像の揺らぎは、これらの小生物が「信仰=自覚の説得」という『護教論』最大の目的のための比喩にすぎないことも示唆している。パスカルはその比喩を大いに用いながら、人間の本質が理性か本能か、デカルトかモンテーニュか、といった二者択一的な議論の中間にいる自身の立場を複数の断章から説明し、人間の中間性を自覚させ、最終的に読者を信仰へと導くのである。

参考文献

Les Provinciales, Pensees et opuscules divers, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph.Sellier, Paris, Librarie Générale Française,《La Pochothèque》,2004.

Les Essais, Montaigne, édition établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, édition des "Notes de lecture" et des "Sentences peintes" établie par Alain Legros, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2007.

La Bible, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, préface et textes d'introduction établis par Philippe Sellier, chronologie, lexique et cartes établis par Andrée Nordon-Gerard, Bouquins, Robert Laffont, 1990.

Descartes, *Œuvres complètes*, tome III, Discours de la méthode, éd. sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner Gallimard, Collection Tel, 2009.

Descartes, *Œuvres complètes*, tome IV-1, ,Méditations métaphysiques - Objections et Réponses (I à VI) , éd. sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner Gallimard, Collection Tel, 2018.

Descartes *Œuvres complètes*, tome IV-2, , Méditations métaphysiques - Objections et Réponses - Lettre au père Dinet , éd. sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner Gallimard, Collection Tel, 2018.

前田陽一『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』東京創元社、1989 年.

ジャック・デリダ『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』鵜飼哲訳、筑摩書房、2023 年.
金森修『動物に魂はあるのか―声明を見つめる哲学』中公新書、2012 年.
パスカル『小品と手紙』塩川徹也・望月ゆか訳、岩波文庫、2023 年.
パスカル『パンセ(上)』塩川徹也訳、岩波文庫、2015 年.
パスカル『パンセ(中)』塩川徹也訳、岩波文庫、2015 年.
パスカル『パンセ(下)』塩川徹也訳、岩波文庫、2016 年.
デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波文庫、1997 年.
モンテーニュ『エセー(三)』原二郎訳、岩波文庫、1966 年.
『メナール版　パスカル全集　1』赤木昭三ほか編訳、白水社、1993 年.
『メナール版　パスカル全集　2』赤木昭三ほか編訳、白水社、1994 年.
塩川徹也『パスカル考』岩波書店、2003 年.
塩川徹也『パスカル「パンセ」を読む』岩波書店、2014 年.
塩川徹也『発見術としての学問――モンテーニュ、デカルト、パスカル』岩波書店、2010 年.
山上浩嗣『パスカルと身体の生』大阪大学出版会、2014 年.
『文語訳　新約聖書　詩篇付』岩波文庫、2014 年.
ウィリアム・スミス編『聖書動物大事典』小森厚・藤本時男編訳、国書刊行会、2002 年.